

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 9 日現在

機関番号：14201

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26380678

研究課題名(和文)食、農、暮らしの再編とむらの女性力についての社会学的研究

研究課題名(英文)Food production, family farming and role of females in Japanese rural society

研究代表者

柏尾 珠紀 (KASHIO, Tamaki)

滋賀大学・環境総合研究センター・客員教授

研究者番号：70414034

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、暮らしの中に埋もれた女性力を掘り起こすことを通して、戦後の農業・農村発展史の中に女性を位置付けた。戦後に地域農業や農村社会が劇的に変化した際、女性は男性同様に土木作業に従事するなど地域発展を下支えし、社会的な変化に柔軟に対応することで自家農業の発展を指向し、食をはじめとする日々の暮らしを成り立たせた。稲作の機械化初期段階から大型化までの男女の農作業の変化を詳らかにしたことで、機械導入の初期において女性の作業が重労働化したこと、女性が稲作農業の技術から切り離された経緯や稲作から退去した端緒も明らかにすることができた。

研究成果の概要(英文)：This research attempted to reveal the contribution made by women toward rural development in Japan from the post war period to the 1980s when a structural change occurred in rural societies. The rural females played an important role to support the family income by engaged in construction works with male workers. This study also showed the changes of farming operations carried out by women after the introduction of agricultural machinery. It is indicated that rural female became less interested in rice cultivation as they lost opportunities to learn how to operate the machinery and were separated from farming in rice fields.

研究分野：農村社会学

キーワード：農村女性 ジェンダー 農村発展史 農山漁村 生活

1. 研究開始当初の背景

農山漁村の地域活性化、地域づくり活動において女性の重要性が謳われるようになり、久しく、2012年には、日本村落研究学会の年報『農村社会を組み替える女性たち』において、地域づくりで主体性を発揮する女性を取り上げられた。だが、男女共同参画法が整備されて15年近く経てもなお、農山漁村の地域活性化への女性の参画が十分には進んでいない状況が浮き彫りになったのである。

他方で、「女性の遊び」とみられていた加工などの起業が、農業生産や農家に転換をもたらす労働として位置づけられ(天野、2008)、また、女性が直売を通じて経済力を保有することで地域社会や家族の見方が変化することも明らかにされ(轟、2007)、女性活動の「主体性」と「力」が見出された。このように暮らしの中に埋没している女性力の解明は、ずいぶん進んだことも事実である。

農業・農村の発展にまつわる研究をみると、生産手段である農地の改良が常に重要な位置を占めてきた。農業・農村発展の歴史は、農地改良の歴史とみることも可能である。それゆえ、経済的意義についての研究が多数を占め、その社会的意義についての研究はまだ少ない。農地改良が農村の都市化の一因であるという研究(中道、1989)のほかは、環境問題における意思決定(家中、1998)など、環境問題と住民参加に関する研究がほとんどである。戦後の地域発展の一翼を担った農地改良事業における女性力の意義については、全く研究されていないのが現状である。

産業資本主義の一員に組み込まれた女性のシャドウワークについて、農業や家事・育児といった面では研究が進んでいる。だが、農地改良全盛期に女性が担った土木労働等は検討されていない。それらは雇用労働であったが、慣例的で口約束によることが多く、シャドウワークとして組み込まれたからである。当時の経済発展や農業発展に重要な意味をもったにもかかわらず、こういった女性労働の研究はほとんど進んでいない。

申請者は、戦後の土地改良事業全盛期や稲作農業の機械化前後における暮らしの変化を聞き取るなかで、地域内にもたらされた土木事業に女性の力がいかに生かされ、それが地域社会や産業の再編に重要な下支えの役割を果たしたことを確認した。また、漁村集落で女性によりもたらされた収入が漁船の大型化という時代の流れに対応できた事例も見てきた(柏尾、2005、2007)。だが、このような戦後の地域発展を支えた女性力を、農業発展史、農山漁村の発展史の中核に位置付ける研究は申請者以外に未だ見出せない。

戦後の農山漁村社会における変化の研究において、最も明らかにされていないのがこのような日々の生活の中にある「女性力」なのである。農業経営や労働をはじめとする地域の構造変化の研究が進められる際に、捨象されてきた暮らしの中にある「女性力」は、

日々の生活を当たり前継続するための源であり、その研究は現代の地域再生や地域づくりに必要不可欠である。農山漁村地域における「女性力」を解明することは喫緊の課題なのである。

2. 研究の目的

本研究の目的は、戦後の農山漁村社会の変化に関する研究のなかにおいて、もっとも明らかにされていない日々の生活の中にある「女性力」の解明である。女性力とは地域社会の構造再編や発展指向を柔軟に受け止め、それらを下支えする対応力である。このような女性の力を解明し、農山漁村地域社会の発展史の中に女性を位置づけることによって、女性研究を豊富化する。

戦後の農山漁村における代表的な社会的インフラ整備の一つである農地改良事業は、農業者の話し合いのもと、合意形成が成され、土地改良組合が結成され、政府の公的支援のもとで進められた。この合意形成に女性が参画できなかったことについては、女性の社会参画問題として取り上げられてきた。土地改良事業は、農地の所有者である家長男性の意思により進められた地域開発であった。但し、その背景、実態をみると、決して男性だけの力で進められたものではなく、そこに女性の関与が大きく見出せる。女性は合意形成、計画立案に参画できなかったが、事業実施において重要な一主体であった。

このような暮らしのなかに埋もれた「女性力」について、土地改良事業や稲作農業の機械化に着目して、記録として残された事例も含めて、時代背景や社会変化との関係から女性の力を明らかにすることは、女性の「農山漁村的」性格を解明することにもつながると考える。

3. 研究の方法

農山漁村の女性たちの活動は、自家農業の担い手としての役割はもちろんのこと、食の担い手、次世代の育成等、日々の生活のなかにあり、きわめて多岐にわたる。したがって、尼講や婦人部といった農漁村にほぼ必ずある集落の女性生活組織のメンバーを中心に聞き取り調査をおこなう。女性の高齢者からライフヒストリーの聞き取り調査を集中的におこなうことで、概ね戦後の激変期における女性の活動は把握できることがすでに明らかになっている。

具体的には以下の内容について調査研究及び文献の整理をおこなう。

(1) 土地改良事業における女性の労働参入の実態把握とその経緯について

(2) 稲作農業の機械化前後における女性の農作業の変化について

(3) 「おかず漁」の実態把握について

これらの調査を踏まえて、農山漁村集落の再編期において発揮された女性力とその意義の解明に焦点をあてて研究を進める。

農山漁村という男性的な意思決定がなされる傾向がまだ強い社会において、舵取りを下支えしてきた女性力を検出するためには、地味で忍耐強い掘り起こしが必要である。綿密な聞き取り調査によって女性力の事例の蓄積を急ぎ、時代背景と照合することで、現在の見解を豊富化する再考作業をする。

調査地は、近畿では滋賀、北陸では新潟、東北では秋田、比較検討のために四国と瀬戸内海の島嶼部を設定した。これらの調査地を選択した理由は以下の通りである。

近畿では、戦後に干拓や灌漑の近代化をはじめとする土地改良事業で、地域の空間が劇的に変化した滋賀県を取り上げる。土地改良事業や稲作農業の機械化によって、女性の農業労働がどのように変化したのかを明らかにする。また、女性が土木作業に従事する際の経緯や、仕事を紹介し合う女性ネットワークの解明に努める。琵琶湖を擁する滋賀県では漁業兼業の農家も多く、水田漁労をはじめおかず漁をおこなっていた。遊びの意味合いの強い男性の季節的な魚捕りとおかず漁の違い、そしてその意味を考察する。

北陸、東北でも同じく干拓を経験した新潟県亀田郷、秋田県大潟村を対象としているが、亀田郷と大潟村では入植という共通性があり、同じく水田漁労の特徴と役畜や機械の共同利用の経緯がある。これらの地域で聞き取り調査をおこない、得られた情報を他地域のデータと比較検討するなかで、農山漁村的な女性力の特徴を抽出する。

島嶼部漁村に関しては、資本主義発展を支えた採石の島である兵庫県姫路市家島町を調査地とする。採石業と漁業が生業である島の暮らしは、社会変化の影響を受けやすい条件下にある。そのような社会でこそ女性活動は大きな意味をもったと考えられるため、農村部と比較検討が可能である。

以上の地域調査を踏まえて、戦後の社会変化の際に発揮された女性力を検証し、女性力の見える化を図る。

4. 研究成果

本研究では、暮らしのなかに埋もれた「女性力」を掘り起こし考察することで、「女性力」を解明し、戦後の農業・農村発展史のなかにそれを位置付け、女性の「農山漁村的」性格を明らかにした。聞き取り調査をおこなうと同時に、伝記や地域史のなかに残されている事例も含めて、資料の発掘や整理をおこなった。その結果、農業の近代化、とりわけ、稲作農業の機械化と灌漑の近代化、圃場整備などの土地改良事業を推進した過程では、記録にも残されていない女性の活動があったことを明らかにした。

本研究の成果は、戦後の農業構造変化に関する多大な研究蓄積とジェンダー研究の接合を図る一方で、他方では、民俗学や家政学、とりわけ、実態把握と栄養学的考察に収斂しがちな食文化分野の研究を地域社会研究の

視点からとらえ直したことである。以下では項目に沿って研究成果を順に記す。

(1) 土地改良事業における女性の労働参入の実態把握とその経緯について

土地改良事業が地元で導入された際に、農村女性は男性同様に土木工事に従事した。それは事業を推進させる力となっただけでなく、婚家に現金収入をもたらせた。地域で導入された土木事業に女性が雇用されたことは農村部では広く認知されていたが、データや資料もなかった。

当時の写真を発掘し、高齢者へ丁寧に聞き取り調査をおこなった結果、土地改良事業の土木作業に、当該集落の嫁を中心とした女性がほとんど参加していたこと、そしてそれは全国的な傾向であったことがわかった。

このような日雇い労働に、男性は集落を超えて従事することはなかったが、女性は集落を超えて従事した。嫁たちは、女性ネットワークを駆使して出身集落の土木作業にも参加して現金収入を婚家にもたらせた。女性たちが土木作業で得た収入は、機械の導入にも生かされ、当時の農家経済を支えた。

他方で、圃場整備の進展にともない、女性や高齢者の経営である自給用の畑地は、移動を余儀なくされた。食を支える自給用の畑地は条件の悪い場所へ移動されることもあり、稲作農業の効率化の過程で、女性の営農空間も影響を受けた。これらについては、「家族・集落・女性の底力」(2014)においてまとめた。

(2) 稲作農業の機械化前後における女性の農作業の変化について

稲作農業機械化以前における農作業は、男性と女性で異なっていたにもかかわらず、家族労働として作業が記録されており、機械化の前後において男女の労働にどのような変化が生じたのかについて、その詳細は不明であった。そこで、機械導入による農作業の変化について、男女別、機械の進展段階別に聞き取り調査をおこなった。

調査の結果、機械化初期段階では男女ともに大きく変化したが、とりわけ、男性の作業変化に比べて女性の作業変化に注目しなくてはならないことがわかった。機械が導入された際、男性は機械操作を担い、女性は機械化により新たに生じた周辺作業全般を一手に担うことになった。機械にまつわる新しい技術を次々と取得した男性に対し、女性は新しい技術とは無縁であったのである。稲作農業の技術保有における男女の決定的な分岐点がこの時期にあると考えられた。

機械化の初期段階で女性の農作業は、機械化以前よりも重労働化した。女性は世帯主ではなく、機械の速度に合わせることを強いられたからである。また、技術の視点から田植え機の導入をみると、女性が稲作農業の技術から如何に切り離されたのか、その過程を知ることができる。田植え機が導入される以前は、田植え作業は女性にとって、技術を

披露し評価される場であった。女性は田植えの技術が評価され、他地域の田植えに雇用されることもあった。他地域で雇用され、収入を得ることにより婿家からも評価された。

田植え機が導入されると、女性たちは腰を曲げて移植作業をおこなうという重労働から解放されたが、技術を習得することや評価される機会もなくなった。

技術に注目して稲作農業の機械化過程をみていくと、男性の技術独占の過程と、女性の稲作農業技術からの撤退とその経緯がみて取れる。これらの考察については、「稲作農業の機械化と女性農業労働の変化 - 滋賀県の湖岸部集落における調査から - 」(2016)にまとめた。

(3)「おかず漁」の実態把握について

農村部において土地改良事業導入以前に、日常的におこなわれていた「おかず漁」の実態把握をすると同時に、その担い手や技術、調理について聞き取り調査をおこなった。琵琶湖岸農村部におけるおかず漁は、民俗学の分野で考察されてきたテーマでもある。その際に注目されたのは漁労の技術や行為者と場所とのかわりであり、担い手や調理については言及されることがなかった。

このような「おかず漁」が存在したことは、地域で広く語り継がれていた。だが、それを誰がどこでどのようにおこなっていたのかなど、その全体像は不明であった。そこで、湖岸地域、内陸部、山間部の地域類型別に聞き取り調査を実施し、民俗学や栄養学、家政学、地域史等の文献を検討した。その結果、「おかず漁」の担い手、場所と漁具との関係、男女による漁具や技術の違い、採取した魚介類をどのように調理、保存したのかを解明した。

漁労の男女における違いと特徴は、男性が大河川や琵琶湖に繰り出して旬の魚を捕ることが多かった一方で、女性や子どもは身近な水路で日々おかずになる雑魚を捕っていたことである。女性が使用した漁具はあまり技術が必要のないものであった。調理は全般的に女性に任されていた。つまり、女性が身近な水路でおこなっていた「おかず漁」が日常的な暮らしの食を支えていたのである。

魚を捕る場所と技術および魚種の違いが、女性の漁労を不可視にしていたことも重要な論点であることがわかった。このような女性の漁労が減少したのは、身近な水辺の消滅が直接的な要因であり、土地改良事業や灌漑の近代化と表裏一体であったことも明らかであった。これにより、採取食の意味も明らかになることができた。これらは「滋賀におけるおかず漁 - 女性と男性の違いに注目して - 」(2015)にまとめた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計4件)

柏尾 珠紀、「稲作農業の機械化と女性農業労働の変化 - 滋賀県の湖岸部集落における調査から - 」『滋賀大学環境総合研究センター年報』(査読無) 第13巻第1号、2016年、pp.11-19

柏尾 珠紀、「滋賀におけるおかず漁 - 女性と男性の違いに注目して - 」『滋賀の食文化研究会年報』(査読有) 第24号、2015年、pp.26-32

柏尾 珠紀、「滋賀における環境再生とその担い手像」『滋賀大学環境総合研究センター年報』(査読無) 第12巻第1号、2015年、pp.9-18

柏尾 珠紀、「環境配慮的な農業を支える田をめぐる記憶 - 琵琶湖畔の農業集落の調査から - 」『滋賀大学環境総合研究センター年報』(査読無) 第11巻第1号、2015年、pp.33-43

[学会発表](計1件)

柏尾 珠紀、「滋賀における女性の漁労」、日本村落研究学会中国四国研究大会、2014年9月28日、岡山大学津山キャンパス(岡山市北区)

[図書](計2件)

柏尾 珠紀、牧野 厚史、谷口 真人、渡邊 紹裕、『変わりゆく母なる湖の水と暮らしフィールドから考える地球の未来 - 地域と研究者の対話 - 』(共著) 昭栄堂、2016年、全286p、pp.28-54

柏尾 珠紀、徳野 貞夫、『家族・集落・女性の底力、シリーズ地域の再生11』農山漁村文化協会、2014年、全348p、pp.225-344

6. 研究組織

(1) 研究代表者

柏尾 珠紀 (KASHIO, tamaki)

滋賀大学・環境総合研究センター客員教授
研究者番号：70414034